

教育経済建設常任委員会行政視察報告書

富 永 悦 子

○長野県松本市

「街なみ環境整備事業」及び「歩いてみたい城下町整備事業」について

【所 見】

天正年間に小笠原貞慶が深志城を松本城と改め、本丸を中心として城下町の基本的な形を作り、城下と町家の区別をはっきりさせ城下町の原型を築いた。明治初年の学制発布当時の就業率は全国一といわれ、国の重要文化財である旧開智学校や師範学校、松本中学などが次々と建設されるほど、伝統的に教育を重んじる気風がうかがえ、文教レベルの高い都市として知られている。

長らく中南信地域の政治・経済・文化の中心地として、また、「商都松本」と呼ばれ広域商業拠点として発展してきたが、近年の経済状況等の変化による中心市街地の空洞化や高齢化の進行から、魅力あるまちづくりに向けた取り組みとして、国宝松本城とその城下町の街道筋に代表される歴史的まちなみ景観等を活かしながら、地域の活性化や住環境整備、中心市街地の5地区を街なみ環境整備事業の対象地区として定め、「歩いてみたい城下町整備事業」として国からの補助金を活用しながら、まちづくりを進めている。

中心市街地のまちづくり事業は、中町地区・下町地区・お城東地区・中央東地区・お城周辺地区の5地区で行っており、中町地区が平成元年にまちづくり推進協議会設立を皮切りに、各地区がまちづくり基本構想策定・まちづくり整備計画策定・まちづくり研究会・まちづくり推進協議会設立を実施して、それぞれの地区の特徴を活かした整備を地区ごとに行ってきたが、平成22年度に5つのまちづくり推進協議会が手をとり合って、「歩いてみたい城下町まちづくり連合会」が設立された。これにより、街なみ環境整備事業の対象5地区を「歩いてみたい城下町地区」として定め、一体的なエリアとして整備することで、松本駅から松本城までの周辺商店街への回遊性を高め、地域の活性化と居住環境の向上を図るとともに、松本城や城下町の歴史を大切にしながら魅力あるまちづくりを行なっている。

市民が中心となり、わが地域の活性化策を住民と行政が協働でまちづくりに取り組んでいる。まさしく、市民力を生かした取り組みである。足利市においても、住民の地域活性化の取組意識を啓発していく仕掛けをどのように行っていくかが課題だと考える。歴史や文化など素材は足利市にも十分にある。最大に生かして

いくべきと考える。

○長野県安曇野市

「安曇野市観光振興ビジョン」について

【所見】

少子高齢化が進展する地域社会において、活性化のキーワードとして観光振興は交流人口増加への取り組みでもある。安曇野らしい観光を展開させていくためには、市民力を生かしながら、大切にしてきた自然や農村景観、歴史・文化、コミュニティを来訪者に伝えていくことが必要だと考え、「はじめよう、『安曇野暮らしツーリズム』」という理念のもと「安曇野市観光振興ビジョン」を策定した。

本ビジョンでは、観光関連事業者だけでなく市民や他産業などとの協働のもと、観光を軸として安曇野市全体を豊かにしていくことが観光振興の意義だと考え、さらに安曇野市らしい観光を展開していくための、土台となる安曇野らしい暮らし方・生き方について「安曇野暮らし5箇条」を定め、市民と来訪者との交流を通じ、「安曇野暮らし」を「まもる・そだてる・つたえる・つなげる・うるおう」さらに磨き上げていくことがの取り組むべき観光だと施策を推進している。

課題として、平成23年に放送されたNHK連続テレビ小説「おひさま」は、広く海外にまで発信され、『信州・安曇野』の認知度は更に大きく向上し、市民は安曇野で暮らすことの誇りを再認識するきっかけとなった。そこで、地域資源を再認識し、来訪者との交流を通じて、内外に誇れるまちづくりに向けて自ら取り組んでいくことが求められている。また、特にアクティブシニアと呼ばれている団塊世代を中心とした層は、人口も多く、旅行に対して意欲的であると言われていくことから、さまざまな地域で注目されているマーケットとなっている。このようなシニア層に対応していくためには、知的好奇心を満たす仕組みや質の高い旅行を提供していくこと、またバリアフリーなどの整備が求められる。更に、訪日外国人旅行者数は安曇野市に5,448人泊であり、今後も拡大していくと予想される訪日外国人旅行者に対して、早急に情報の多言語化などに対応していく必要がある。

足利市も、地域資源の市民への理解の拡大と国内外への認知度の向上はさらに力を入れて取り組んで行かなければならない課題である。